

第25回 親と子の古墳めぐり

古代吉備の謎にチャレンジ!



備中国分寺跡



造山古墳

備陽史探訪の会

「親と子の古墳めぐり」参加の皆さんへ

わたしたち「備陽史探訪の会」は、福山周辺の歴史を学ぶことを通じて、この地域の文化を再発見することを目指しています。

そのための活動の一つとして、毎年5月5日のこどもの日に「親と子の古墳めぐり」というイベントを開催しています。

これまでは、福山周辺の古墳や遺跡を見学してきました。けれども今回は、このイベントの25回目を記念いたしまして、「吉備の国」の代表的な古墳や遺跡を探訪することを計画しました。

といいますのも、福山地域を含む「備後」は、現在の岡山県を含めて、古代には「吉備」と呼ばれていました。そして、この「吉備」には大きな勢力を持った豪族たちがいて、大型の古墳をはじめとする全国的にも有名な遺跡をたくさん残しているからです。

本日は「吉備」の中でも、岡山県総社市と岡山市の周辺に残されている、全国でも最大級の前方後円墳、古代の山城の跡や国分寺の跡など、歴史の教科書などにも紹介されている、大変貴重な古墳や遺跡を探訪します。

この「親と子の古墳めぐり」は、文字どおり親と子が一緒に歩きながら、身の回りの文化財を知り、それらに興味を持つことによって、地域の歴史や文化を学ぶキッカケになれば、という思いで行っています。

どうか、新緑のまぶしいこの一日が、参加者の皆さんにとって心地よい汗とともに、親子の語らいの機会にもなりますようお願いいたします。

平成19年5月5日

備陽史探訪の会
会長 田口 義之

古墳時代のことを知ろう！

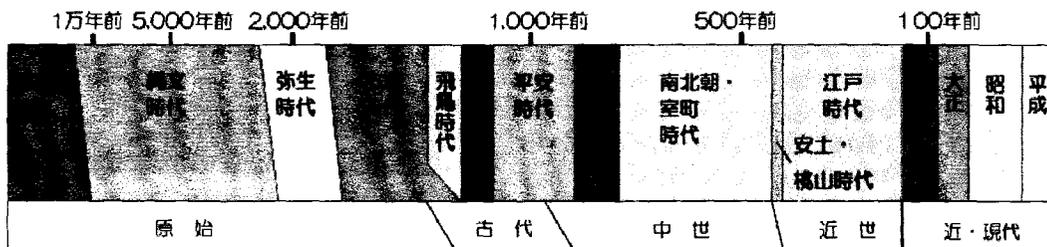
古墳（こふん）時代は今から約 1,750 年から 1,300 年くらい前のことです

「古墳」というのは、土を盛り上げて作っています。その表面には石が敷きつめられていて、頂上や周りには埴輪（はにわ）が並び、内部には、棺を納める石室がありました。棺の中には遺体のほかに、鏡や剣・武器や武具などが納められていました。

3 世紀の後半の古い古墳の中でも大型のものは、大和（現在の奈良県）地域に作られました。このことから、大和を中心とした地域に強い権力をもつ王が存在していた、と考えています。

5 世紀の後半には、九州北部から関東地方までの各々の地域の権力者は、大和の勢力に従うようになったと考えられています。そうした大和の権力者を、中国では「倭王（わおう）」、国内では「大王（おおきみ）」と呼びました。

古墳の大きさは、その人に権力があることを示していました。しかし、中国大陸や朝鮮半島から新しい技術や政治の方法が取り入れられると、大きな古墳を作る必要がなくなりました。奈良時代は、そうした新しい国づくりが行われた時代でした。



造山古墳（岡山市新庄下）



造山（つくりやま）古墳は、岡山県では最大の大きさの古墳で、全国でも第4位の大きさの超大型前方後円墳です。

ちなみに、全国第1位は、大阪府の仁徳天皇陵古墳（全長486m）。2位が応神天皇陵古墳（425m）、3位が履中天皇陵古墳（365m）です。

この造山古墳は、全長が約360mで、後円部の直径は200m・高さが24m。前方部の幅は215mもあります。周辺には、陪塚（ばいづか）と呼ばれる中小の古墳が築かれていて、「吉備」の地域を代表する古墳です。古墳時代の中ごろである、5世紀のはじめごろに作られたと考えられています。

この古墳は、低い丘陵を切断して、さらに土を盛ったり、削ったりして前方後円墳の形にしています。

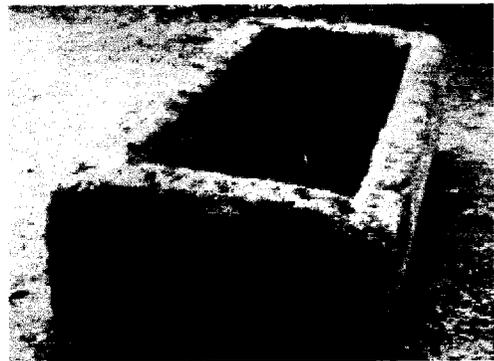
古墳自体は上段・中段・下段の三段に築かれていて、前方部と後円部との境目のあたりに台形の「作り出し」と呼ばれる部分があります。

こうした大型の前方後円墳には、周囲に濠がめぐらされていることが多いのですが、この造山古墳には濠はなかったようです。

また、古墳の表面には石が敷きつめられていて、これらを「葺き石」と呼びます。さらに、墳丘の各段には、円筒埴輪がめぐらされているほかに、武器や家の形をした埴輪も見つかっています。

埋葬施設は発掘調査を行っていないので、よくわかっていませんが、墳頂部には阿蘇山周辺の岩で作られた石棺が残されており、九州地方との関係が想像されます。

これらの古墳の規模や内容などから、造山古墳は、「吉備」の王であることはもちろん、当時の「倭国」の王ではないか、という説もあります。



こうもり塚古墳（総社市上林）

こうもり塚古墳は、総社市の「吉備路風土記の丘県立自然公園」の中にあります。

全長 100mの前方後円墳で、古墳時代の後期である6世紀の後半に作られました。

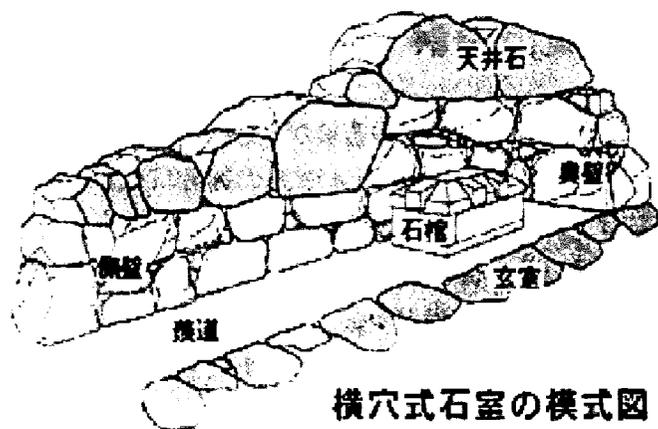
後円部には横穴式石室が作られています。大きな石を積んで作ったその石室は全長が約 19.5m もあり、岡山県下では最大、全国でも最大級の横穴式石室です。

石室の奥、遺体を収める部屋である玄室（げんしつ）は、幅が 3.6m・長さが 8 m・高さが 3.7m もあります。通路部分である羨道（せんどう）は、幅が 2 m・長さが 11.7m・高さが 2.3m あります。

さらに、その石室の奥の玄室には、家の形をした石棺が残されているのを見ることができます。この石棺の石は、岡山県の西部にある井原市で採れるものです。

この石棺のほかに、粘土を焼いて作った陶棺（とうかん）や、木棺も使われていたようで、何人かの埋葬が行われたことがわかっています。

石室の中からは、太刀や馬具、鉄製の矢じりや玉類、須恵器（すえき）などたくさんの副葬品が見つかっています。

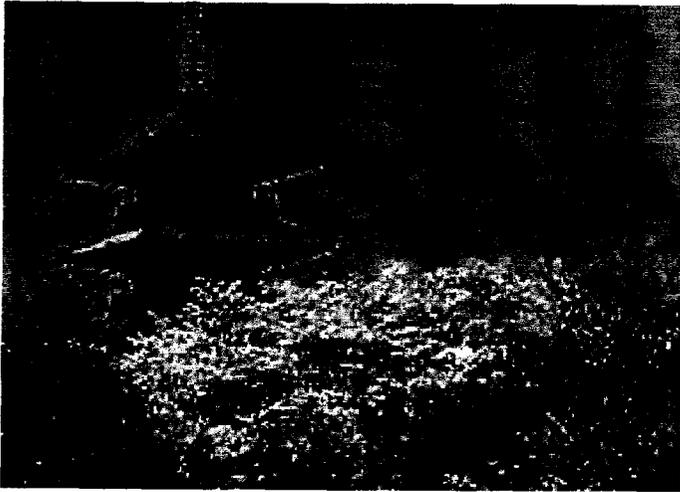


横穴式石室の模式図

特に太刀については、柄頭（つかがしら）と呼ばれる装飾の部分が出土していますが、中国の伝説上の鳥である鳳凰（ほうおう）をかたどっていて大変に立派なものですから、この古墳に葬られた人が高い地位にあったことが想像できます。



備中国分寺跡（総社市上林）



国分寺（こくぶんじ）は、仏教の力によって災害や飢饉などから国を守ろうと、聖武（しょうむ）天皇によって、奈良時代の天平 13 年（741 年）に全国へ建てられた、いわば国立のお寺です。

建てられた当時の建物は、南北朝時代に火事で失われたと言われています。現在の建物は江戸時代の中期以降に再建されたものばかりです。

元々の国分寺の範囲は、東西約 160m・南北約 180m あったと推定されています。周囲には高さ約 1.2m の築地土屏がめぐらされており、その内側には、南門・中門・金堂・講堂・塔などの建物がありました。

発掘調査の結果、南門の跡や中門跡などは場所などが確認されましたが、それ以外の建物についてはくわしいことがわかっていません。

現在の国分寺の五重塔は、江戸時代後期の文政 4 年（1821）から弘化元年（1844）ごろに再建されたものですが、岡山県内唯一のもので、高さは約 34m あります。



3 層（階）までは総ヒノキづくりですが、4・5 層（階）はマツ材が主体となっています。その中心部には、床下の礎石から屋根の頂上の相輪（そうりん）部分までマツの柱が貫いています。

塔の中には如来（にょらい）像が置かれ、壁面には天女（てんにょ）のほか季節の花々の絵が描かれています。

吉備路を代表する風景として、この五重塔は大変に有名で、国の重要文化財に指定されています。

国分尼寺跡（総社市上林・宿）

国分尼寺（こくぶんにじ）は、国分寺と同じく仏教の力によって災害や飢饉などから国を守ろうと、聖武（しょうむ）天皇により、奈良時代の天平13年（741年）に建てられた尼寺です。

現在は、林の中に礎石のみが当時のまま残されています。

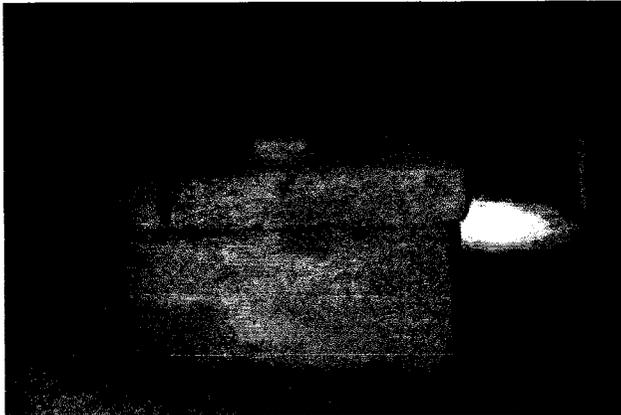


当時の境内は、東西108m・南北216mと推定されています。

建物としては、南門・中門・金堂・講堂・塔があったと考えられます。

江崎古墳（総社市上林）

国分寺跡の北方の山裾にある前方後円墳です。6世紀後半に築かれた、「吉備」地方における最後の前方後円墳のひとつと考えられています。



前方部を山側に向けており、全長は54mあります。

後円部の直径は32m、前方部の幅は25m。二段に築かれており、後円部の一部を除いて周囲には濠がめぐらされています。

西側に入り口の開いている横穴式石室があり、全長は13.8mです。玄室の長さは6.6m・幅2.6mあります。

玄室の中には、こうもり塚古墳と同様の家型石棺があり、発掘調査の結果、人骨のほかに鏡や刀、馬具・鉄製の矢じり・須恵器など大量の副葬品が見つかりました。

鬼ノ城（総社市奥坂）



鬼ノ城（きのじょう）は、総社平野を眼下に見下ろす鬼城山（高さ400m）の8合目から9合目にかけて築かれた古代の山城で、周囲約2.8kmにわたって石積みの城壁がめぐっています。

この城のことは、古代の書物には登場しませんが、地元に残るお話しとして、「百済の王子（名前を温羅（うら）と言います）が吉備の国にやってきて、ここに城を構えた」と伝えられていて、桃太郎伝承のひとつとも言われます。

ところが、発掘調査の結果、この城が今から約1,340年前の西暦663年に、日本が唐と新羅の連合軍に朝鮮半島の白村江（はくすきのえ）で敗れたことから、その後に、国土を守るために西日本の各地へ築かれた古代の山城のひとつである、と考えられるようになりました。

城壁沿いには、角楼（かくろう）・城門、水門などが、城内には礎石建物がみつかっています。

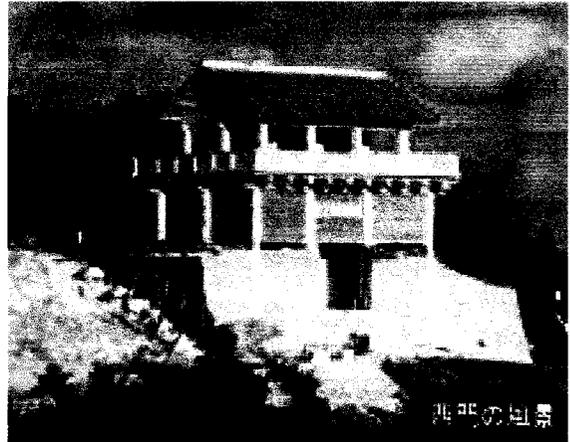
角楼は、古代の山城では、鬼ノ城でしか見つかっていないものです。タテ約4m・ヨコ約13mの長方形の張り出しが城壁から伸びていて、城壁での防御のための施設と考えられています。

西門は、12本の柱で構成されている掘立柱の城門です。

正面は3間（12.3m）、奥行きは2間（8.3m）あり、大規模なものです。

内側に開く門扉があり、石段を登ると城内に入ることができるようになっています。平成16年に復元され、その豪壮な城門の様子を実感することができます。

城門はこの西門を含め、東西南北に設けられていて、約30haに及ぶ城内を守っています。



このほかに、城壁の要所要所には水門が設けられています。現在6ヶ所確認されていますが、城内の水を管理するための排水口です。



城内には、食品の貯蔵庫と考えられている礎石建物跡のほかに、のろし場・水汲み場なども明らかにされています。

さらには、兵舎や作業場などの存在も予測されていますが、未発見です。

この鬼ノ城は、国分寺周辺をはじめとする「吉備」の中心部分を一望できる上に、はるか瀬戸内海や、遠くは四国の山並みが見える絶景の場所になっています。まさに、“吉備要衝の地を守る”山城です。

作山古墳（総社市三須）



作山（つくりやま）古墳は、岡山県では第2位の大きさの古墳です。

全国でも第9位の大きさの大型前方後円墳です。

全長は約285mです。後円部は直径が約170m・高さは20m、前方部の長さは約110m・幅は約170mあ

ります。この古墳も、低い丘陵を切断して作ったと考えられます。

上段・中段・下段の三段に築かれており、その段の平坦面には埴輪がめぐらされています。

墳丘の斜面には葺き石が敷かれ、墳丘の北側には作り出しも見られます。

築かれた年代は、5世紀の中ごろと考えられており、造山古墳に葬られた人に続いてこの地域を支配した豪族の墓である、と想像されます。

この古墳も発掘調査が行われていないので、詳しいことはよくわかっていません。

けれども、この古墳の築造以後、吉備地方での古墳づくりは縮小化に向かうということが知られています。



角力取山古墳（総社市山手）

角力(すもう)取山古墳は、古墳時代の中ごろ、5世紀に築かれた古墳と考えられています。

古墳の形は南北 30m・東西 37m の方形で、高さは7mあります。

古くから古墳の西側に土俵が設けられて、付近の神社の奉納相撲(角力)が行われていたことから、角力取山と呼ばれるようになった、とされています。



峠古墳群（総社市清音三因）



古墳時代の終わりごろである6世紀から7世紀には、横穴式石室を持つ小型の古墳が爆発的な数作られました。

三因地区には、「三因千塚(みよりせんづか)古墳群」と呼ばれて、丘陵の斜面や尾根上に総数約200基の古墳が築かれています。

これらは、小規模の円墳がほとんどを占めており、こうした小規模古墳が密集して築かれている状況を「群集墳」と呼んでいます。

峠古墳群は、その一部を移築したもので、4基の小円墳の群集状態を見学することができます。

こうした群集墳は、古墳時代のなかで生産力を高めてきた有力な家族層の墓である、と考えられています。

けれども、こうした爆発的な古墳の築造も7世紀の後半には見られなくなり、ごく一部の個人墓が築かれるのみとなります。

備陽史探訪の会

資料作成：備陽史探訪の会 古墳部会

資料参照：古代吉備文化財センター

岡山市・総社市

近つ飛鳥博物館 のHP